

## 実践女子大学図書館蔵『松浦宮物語』（五種）解題

平井仁子

実践女子大学文芸資料研究所『年報第五号』（昭和六一・三）に、調査報告十四として、本学図書館蔵松浦宮物語の常磐松文庫所蔵本二本と黒川文庫所蔵本三本が、持田早百合氏によって紹介されている。

松浦宮物語の伝本に関しては、「伏見院宸筆本」と「後光厳院宸筆本」の二系統、しかも前者は伏見院宸筆本一本のみで、あとの諸本はすべて後者という整理が、現段階では定着している。それは、吉田幸一氏『松浦宮物語伏見院本考（古典聚英六）』含、伝伏見天皇宸筆「松浦宮物語抜書」一卷（名古屋徳川美術館蔵）（古典文庫）（平成四・十一）の「第二『松浦宮』諸本の系統と書誌」に詳しいし、また、久保田孝夫・関根賢司・吉海直人氏編『松浦宮物語』（一九九六・三）の解説「4 伝本」、萩谷朴氏の『松浦宮全注釈』（一九九七・三）の解説「三 対立する二系統の宗本と末流伝本」などにも同様の報告があることから知られる。

となると、本学図書館所蔵の五本も、「後光厳院宸筆本」系統と見做される。それは、前述した『年報第五号』の調査報告十四に、

以上、常磐松文庫本二本、黒川文庫本三本を紹介したが、いずれも蜂須賀本系統の伝本であるが、その中では常磐松文庫A本が、書写年代も古く、最も忠実に蜂須賀本を書写したものと云いうるだろう。書写年代でいえば、黒川文庫B本がその次かと思うが、このB本をはじめとして常磐松文庫B本、黒川文庫のA本、C本の四本は、蜂須賀本の中の異本かもしれない。いずれの伝本も、目につくほどの特徴を持っているとは云いがたいものである。

(注) この文章での「蜂須賀本」とは、「後光厳院宸筆本」のことであり、本調査報告では、「蜂須賀本」を改め、「後光厳院本」と称す。

と結んでいることでも既に明らかである。ただ、この調査(昭和六一)の段階では、伏見院本の「本文全体が公開されていないので、積極的に利用できないのが残念である。」という状況であった点、これは、前掲の吉田幸一氏『松浦宮物語』が平成四年に刊行され、伏見院本の全容が明らかになったことで現在は解決されている。本調査報告では、その伏見院本と、本学所蔵の五本との位置関係を確認することが主目的である。

本学所蔵の『松浦宮物語』五本、つまり常磐松文庫所蔵本二本(A・B本)、黒川文庫所蔵本三本(A・B・C本)に関しての各々の解説は、調査報告十四で既になされているので、ここではそれら細部は省略し、必要な場合に提示するにとどめる。

まず、形態等について表示する。

	常A	常B	黒A	黒B	黒C
冊・巻	一冊三巻	一冊三巻	上・中・下三巻	上・中・下三巻	上・中・下三巻

題	外・内題なし	「松浦宮物語」 <small>(表紙題簽)</small>	「松浦宮物語」 上 一名正三位	「松浦乃宮」 上 「松浦宮」 中 「松浦宮」 下 <small>(以上、表紙題簽)</small>	「松浦之宮」 上 「まつらのみや」 中 「松浦乃宮」 下 <small>(以上、表紙題簽)</small>
	「松浦乃宮」 <small>(第一卷の扉)</small> 「松浦宮」一 <small>(前巻の余白)</small> 「松浦宮三」 <small>(同右)</small>	内題なし	「松浦宮物語」 上 「松浦宮物語」 中 「松浦宮物語」 下 <small>(以上、表紙裏(見返し))</small>		

これらに対して、伏見院本は、一冊三巻、表紙外題「松浦物語」、二、三巻目に入る箇所(余白)に「松浦宮二」、「まつらの宮三」と記されている。三巻仕立てで、題号が「松浦宮」或いは「松浦(宮)物語」であることは、本学の五本とすべて共通、もつともこれは後光厳院本も同様である。

ここにおいては、二系統の伏見院本と後光厳院本、その伝本の流れである本学の五本と大差ないわけであるが、この二系統の決定的な相違は、伏見院本の三箇所欠脱と、諸本にはみられない和歌一首と短い地の文がある一箇所の、計四箇所である。これらに関して、調査報告十四では、この二本間の出入を、(1)〜(5)として整理してあるので、それに添いながら、伏見院本を実際に踏まえての訂正をしつつ確認してみる。

(1) 伏見院本には、後光厳院本その他の諸本にはない次のような和歌一首と地の文とがある。

「よしこゝに我たまのをハつきなむ月のゆくゑをはなれさるへく みこいとあはれとおほして」(二十九ウ〜三十オ)

これは、吉田氏の本の頭注にも『よしこゝに』カラ、『おほして』マデノ三行分、光・花オヨビ底本以外ノ諸本ニナシ」とある如く、本学の五本にもない。

(2) 伏見院本には四丁分の欠脱がある。

吉田氏の頭注には「底本六十八丁オヨリ七十一丁ウマデ四丁欠。」とあり、この欠脱は、本学五本には全くみられない。  
(3) 後光厳院本その他の諸本には、跋・奥書の後にもう一つ跋が付いているが、吉田氏の頭注に「底本終一丁欠」とあるように、伏見院本にはない。

その跋を、常磐松文庫A本を例として引いてみる。(他四本も同じ。)

これもまことの事也さはかり」傾城のいろにあはしとてあたなる」心なき人はなに事にかゝることは」いひをきたまひけるそと心え」かたく唐にはさる霧のさ」ふらふ」か」(一一一オ)

これは後光厳院本、後花園院本と、傍に記した「は」→「ハ」の表記以外改行箇所まで全く同一である。

(4) 伏見院本八十四オに、十六字分(後光厳院本でいえば)の欠字があるが、文章内容上に支障はない。これも常磐松文庫A本で示しておく。(他四本も同じ。)

秦漢しんかんのいくさおこる河北へいの二十二郡じふにぐんひとりのあたをふせく臣しんなくして(八三ウ)

線の部分が、伏見院本にない十六字分というわけである。これも勿論、後光厳院本もA本と同様である。

(5)としては、伏見院本と後光厳院本の本文を比較、例示しているが、この点に関しては、萩谷氏(前掲の書)が、吉田氏の「後光厳院本は伏見院本の転写本であろう。」という説をうけて、

両者の書写態度を通観するのに、(一)通意の為の宛て漢字に関しては、後者において甚だ多いのに対して、前者は少なく、(二)仮名遣いに関しては、後者が歴史的仮名遣いにより忠実であるのに対して、前者は歴史的仮名遣いに外れることが多いという著しい差異が見られるので、到底、両者の間に直接転写の母子関係があるとは思われない。

とする事実は認められるべきもので、ここでは、実際に本調査報告対象の本学所蔵本で考えてみたい。

一、常磐松文庫 A 本「松浦乃宮」

調査報告十四では、後光厳院本の冒頭二丁分ほどの文章を例示して、この A 本と比較しているが、異同は五箇所、殆んどないといえる。だが、A 本と伏見院本とはそうはいえない。この冒頭二丁分の伏見院本を本行として、A 本を行間の校異に示してみる。

むかし藤原の宮の御とき正三位大納言にて中衛大将のかけ給へる橋の冬明ときゆるあすかのみこの御はらにたゝひとりもたまへるおと子君かたち人にすくれ心たましるよにたくひなくおいゝて給ふをちゝ君ハさらにもきこえす時の人いみしき世の光とめてたてまつる七さいにてふみつくりさま〳〵のみちにくらきことなし御かとき〳〵しめて(二オ)これたゝ物にはあらざるへしとけうせさせ給御まへにめして心みのたいをたまふにめてたきふみをつくりすへてをいゝつるまゝに管弦をならひても師にはさしすゝみふかきてともをひけははて〳〵は人にもとハすおほくハ心もてなんざとりける十二さいにて御まへにてかうふりせさせてうとねりになさせ給あけくれこの人をもてあそハせ給にいたらぬことなくかしこけれハつかさかうふりもほとなく給(二ウ)ハりて十六といふとし式部少輔右少弁中衛少将をかけて従上五位になりぬちゝ君身にあまる官しやくを見たまふにつけてもひとつ子にしあればゆゝしうのミおほざるさしいて給たひにこの子のゆへにのミめんほくをほとこし給へはましてなのめにおほされんやハかたち身のさえたらへることこそあらめよのつねのわかき人のこと色めきあたることもなしたゝみやつかへをつとめかくもんをしてあかしくら(三オ)せは御かとをはしめてまつりてまめにおとな〳〵しき物とおほしたるにわかき心の中ひとつなんひとやりならすくるしかりけるかむなひのみこときこえてきさきハラにてかきりなくきよらに物し給をなんいはけなくよりいかでと思心ふかゝりけるいつれもいとわかきうちによつきたる心もなければはるけやるかたなくてすき

つるを九月ナシきくのえんはてム夕へに人トマかてちるに猶なをさりぬへきひまもやと宮にまいりてけしきを(三ウ)とるに宮も御まへのかれ野御らんすとてはしちかうおはしますほとなりけりむつましくまいりなれたまふ君なればふとも四いり給たまはハす御ひハをわさとならすかきならしつムおはしますけハひしるきに……  
おはしますけはひしるきおはしますけはひしるきに

こうみると、伏見院本とA本の異同がかなり多いような印象をうける。だが、その殆んどは漢字・仮名の宛て方や、仮名づかいの違いである。二ウの「たまふに」と「めてたきふミ」の間に日本では「たとるところなく」が入っている部分と、最後の「おはしますけはひしるきおはしますけはひしるきに」の桁字の部分が異同らしい異同である。しかし、調査報告十四で例示されたA本と後光厳院本との比較において、「殆ど異同はない。訓み下した時、両者の本文が同じになるということだけではなく、漢字と仮名の宛て方も殆ど一致する。」といわれるものに比すれば、伏見院本とA本は、重大な異同ではないにしても多いといわべきなのであろう。

A本が後光厳院本そのもの或いは同系統の本を筆写することを期していたと推測されるのと反して、A本と伏見院本は前掲の(1)〜(4)の大きな相違にプラスして、細かい異同からも別系統ということは確実である。

ちなみに、調査報告十四でA本の書写者が意識的に後光厳院本と違うことをしているのは、「固有名詞や官職名その他の難解語に訓み仮名をつけたことだけではなからうか」とし、その訓み仮名(平仮名)の総数一五二箇所、後光厳院本は三八箇所(片仮名)とある。この訓み仮名に関しては、伏見院本においては二三箇所(片仮名)あり、その箇所は半数以上後光厳院本と重なっているが、訓みが異なる例が多い。後光厳院本の三八箇所中、A本にないものが四箇所あると示されているが、それらは伏見院本にも同じく訓み仮名がない。訓み仮名に関してだけいえば、A本が突出して多く、後光厳院本と伏見院本は少ないが、しかし後者二つに共通点があるかといえば、そうでもないようである。

## 二、常磐松文庫B本「松浦物語」

このB本は、調査報告十四にあるように、本文としては後光厳院本系統のものようではあるが、A本のような忠実な書写本ではなく、乱雑な書写態度で、異同の数も非常に多い。B本と後光厳院本とを比較すると、脱文が九箇所あり、そのうち二箇所は各々約一丁分ほどの、全く文脈を無視した、B本本文の価値を損うものである。伏見院本と後光厳院本とは、この二箇所に関しては大きな異同はないので、従ってB本と伏見院本の関係も、B本の一丁分の脱文ということになる。この部分、伏見院本の本文を例示して脱文を明らかにしておく。(――線部分、脱文)

- (1) いまはとまいり給しのちひとこと葉の御なさけもなかりつるを心うしとおもふになをおりすくさすのたまへるをみるにちのなみたをなかせとつかひハ(十ウ)まきれうせにけれハたゝとゝまる人につけて女王君のもとにいきのをにきみか心したくひなハちへのなみわけ身をもなくかに大将ハなにはのうらまでをくらむとのたまひしかとはゝ宮かきりあらむ神のちかひにてこそそハさらめこのくにのさかひをたにかてかはなれんとのたまひてこそよしまつらの山に宮をつくりてかへりたまハむまでハそなたのそらをみんなわかきおいたると(十一オ)なぎうかへる身のとをきふなちにさへこきはなれたまハむになみ風の心もしらすたれもむなくあひ見ぬ身とならハやかてそのうらに身をとゝめてあまつひれふりけんためしともなりなんといてたちたまへハ大将かきりある宮つかへをえゆるされたまハねとすみたまハんさまをたに見をかむとそひたまへればみちの程ことにかハれるしもしなしかせさへほと(十一ウ)なくて三月廿日の程に大宰府につきたまひぬ大将さへそひおハすれば師の宰相いミしくけいめいしてあそひしふみつくる

この脱文箇所の内容は、『松浦宮物語』の題号由来の重要な部分である。

(2) 燕王のもちゐる所ハ金をあませる商人さけの色にふける少年なりさらにいくさのはかりことをしらしいまきく所その名をしられたるもの(五十三オ)ありやとムひ給ときにおのくいつれありといふ事を申さす后われをろかにいやしき女の身いとけなきよはひにしてかたしけなくかしこき君につかうまつることをゆるされ身にあまる位にそなはりて十かへりの春秋をムくりしかと牝鶏のあしたするいましめをムそれて掖庭のせハき身のうへのことをたにきミの女ことのにあらずして一事詞をくはへおこなハさりきいまはからざるに国のかなしひにあひて越女(五十三ウ)の思にしぬるあとをおはぬあやまちによりてみたるムくにのハちをうく臣下の中にその人をえらひて国の政をさつくへき御かとの御やまひのゆかのもとに顧命をうけ給て朝をたすくへかりし人くハ逆臣のはかりことによりてよこさまにいのちをうしなへてつこのミちにともなふ人くハおのくそのミちをまもらんとしてしりそく心のミあれハうつは物にあらずおろかにたえぬ身にしてちかき世にたにみ(五十四オ)たれし国のあとををひてなましひに母后朝にのそむ名をぬすまむとす

この脱文も(1)と同様物語の展開に欠かすことのできない内容である。

脱文九箇所のうち(1)(2)はこのように約一丁分の大きなのだが、あとはだいたい一行分程度のもので、これも伏見院本を例示し、B本の脱文を――線で記す。

- (3) そのねをつたへてのちに我國にしてその声を(二十四オ)たてたまふことなかれとかへすくちきりてあげ行程にあかれぬれハすゝろにものかなくしてかへる道すからなかめをのミそする
- (4) 御かとハ、きさきひとつ御こしにのり給てにハかに未央宮をいて給ぬさすかに文武のつかさをしたかへてさるへきくにのたからともハもたせ給へれと……(三十九ウ)
- (5) ハるかなるしもやにかしらしるぎ女のひとり侍つるにこムハいかなる人かかよひ給と(七十四オ)とひ侍つればこ

ゝ八人のすみたまふ所にもあらすをのつからたひ人などのやとり給ときもあり

- (6) まとろますねぬ夜にゆめの見えしよりいとゝおもひのさむる日そなき雨ふりくらしていとくらき夜のそらをなをあげなからなめいてたれとうれへやるかたなきにれのところせうにほひくる風のまよひもいとゝ心さハきする……  
(八十六ウ)

- (7) ……しらぬ野山にもあくかれまほしきにけさしもあさまつりこといとゝうはしまりてたひくめさるれはいそきまいるれいのことゝもハてぬれと御門御物かたり(九十八オ)などいとなつかしうかたらハせたまひつゝ日もくれぬ

- (8) あつさ所せきころまつりことはてぬるにことらうとき人もさふらハす御かときさぎすこしうちやすませ給とて(百ウ)ミつにのそみたるらうの風すゝしきかたにおはしますにめしあれはまいりてつちひさしの石のうへにさふらふ

- (9) ……かなしき事もさまくおもひつゝくれとけちかき御けハひにはましてなのことハりもおほえすたゝいまひとたひの夢のたゝちをのみおもひいらるれとなに事もかくれなくハるけては……(百六ウ)

これらの脱文に共通することは、致し方のない理由による脱文と思われるものはない点である。また、伏見院本と後光厳院本との大きな異同もなく、現状ではB本のみの脱文といえそうである。従って、勿論B本が伏見院本に近い証左にはならず、B本を後光厳院本系統と認める結論に変わりはない。

本学図書館黒川文庫の三本、

一、A本——本居大平本「松浦宮物語」

二、B本——月屋升芳本「松浦乃宮」

三、C本——春村校本「松浦之宮」

に關しても、伏見院本と比して目新しい発見はないように思われる。念のため調査報告十四にある黒川文庫諸本対照表に伏見院本を加えたものを次に掲げる。

	伏見院本	後光嚴院本	A本(大平本)	B本(月屋本)	C本(春村校本)
①	身のさえたらへる (三オ)	身のさえたらへる (二オ)	身のさへたらへる (二オ)	身のさえたらひたる (二オ)	身のさえたらへる たひたる古(朱) (二オ)
②	おほしたるに (三ウ)	おほしたるに (二オ)	おほしたるに (二オ)	おほしたるに (二オ)	おほしたるに たてる古(朱) (二オ)
③	心さハきして (四オ)	心さはきして (三オ)	心さハきして (三オ)	心さはきして (三オ)	心もわき／＼して さわ古(朱) 古(朱) (二ウ)
④	あたれるまのすのしたに (四ウ)	あたれるまのすのしたに (三オ)	あたれるまのすのしたに (三オ)	あたれるすのしたに (三ウ)	あたれるまのすのしたに 古(朱) (三オ)
⑤	かつ／＼ (十オ)	かつ／＼ (七ウ)	かつ／＼ (八オ)	かつ／＼ (八ウ)	／＼古(朱) かれ／＼ (七ウ)
⑥	道／＼の人 (十オ)	道／＼の人 (八オ)	道／＼の人 (八オ)	みち／＼の人 (八ウ)	ミお／＼乃事 みち／＼の人古(朱) (七ウ)
⑦	心ミ (十オ)	こゝろ見 (八オ)	こゝろミ(朱) こゝろミ (八オ)	心ミ (七ウ)	こゝろミ (七ウ)
⑧	弁少将うちたゝ (十二ウ)	弁少将うちたゝ (九ウ)	弁少将うちたゝ (二〇ウ)	弁少将うちてゝ (二〇ウ)	弁少将うちたゝ 氏忠風葉集(朱) いてゝた(朱) (九ウ)
⑨	ひんなくも (二三オ)	ひんなくも (二〇ウ)	ひんなくも (二一オ)	みな／＼も (二一オ)	ひんなく みな／＼古(朱) (二〇オ)

伏見院本は、後光嚴院本と黒川文庫本A本(大平本)と、ほぼ同じである。だが、黒川文庫本の三本とも、伏見院本と

後光厳院本との決定的な相違の視点からすれば、後光厳院本系統であることはまちがいない、伏見院本とのつながりは想定できない。

以上のことから、本調査の主たる目的である伏見院本と本学所蔵の五本との関係は、五本が後光厳院本系統の本文であることを再認するという結果になる。

後光厳院本系統の諸本は数多く紹介されているが、天理図書館蔵の三本については閲覧の機会が得られたので、ここに追記の形で記してみる。

(1) 親見正路筆本

外題「まつらのみや」、内題なし。十一行書き(一オのみ一〇行)、全体八五丁。頭注が上巻に一箇所、あと朱筆で一、二字の訂正が十数箇所ある。内容について特記すべき点はない。

(2) 西荘文庫旧蔵本

題簽「松浦物語上(中・下)」、内題「松浦物語の上」、「松浦物語中」、「松浦物語下」。一枚目だけ十一行で、あとは十行書き。一オに頭注として朱筆で、

中衛 正城天皇大同二年勅以近衛以為左近衛以中衛為右近衛

藤原 持統天皇八年十二月清御原宮より遷都

とある。これは、前掲の吉田幸一氏の著書の解説に紹介されている大野広城筆本の朱筆頭注と同一(正城天皇の「正」が広城本では「平」とある)である。また三オの二行目から四行目にかけても、朱筆頭注で「女王義解同謂二世以下四世以上五世則入命婦宮人之例……」とある。

(3) 小津桂窓筆朱書本

題簽中央「まつら物かたり 全」、内題なし、九行書き。上巻が終わって中巻が始まるその第一行目の右傍に、頭注部分から本行部分にかけて一行書きで、「猪苗代謙宣本為三冊自是中之巻」という朱筆の識語がある。また下の巻に入るところに頭注の部分に朱筆で「下之巻」とある。全体に朱筆で校異を示す箇所が多くみられるとともに、和歌を引用した頭注も多い。巻末に

徹書物語に云……（中略）……よもすから月に愁ひてねをそなくいのちにむかふ物思ふとて命にむかふと云詞は松浦物語に在詞也かやうに定家卿の哥は本説をふまへてよみ給也

という長い勘物と、そのすぐあとに一行、

風葉集に此物語の哥ともを多入られたり

と加えられている。

以上三本も、伏見院本と後光厳院本との大きな異同部分でみれば、明らかに後者の系統になる。本調査の本学図書館蔵の五本との関係は特筆すべきものはないようであるが、(3)の小津桂窓筆本は、黒川文庫本C本となにか関わりがあるかもしれない。というのは、この小津桂窓筆本の巻末の勘物に引かれる『徹書物語』や『風葉集』の名が、この黒川文庫本にも見られるからである。黒川文庫C本の表紙見返しの貼紙に、朱筆で「風葉所載歌十八首」とあること、また次の上巻の前遊紙オに「正徹物語下……」として引用している文章は、小津桂窓筆本の勘物とほぼ同一であること、この二点が共通している。小津桂窓筆本が巻末、黒川文庫C本が巻初と、その提示されている場こそちがうが、内容は近似している。両本の本文を詳細に検討することと、このような勘物が他本にも存在するのかどうかなどの問題を解決しないと結論を出せないが、現段階ではその可能性を否定することはできないだろう。